



ヤンさんと地域日本語教育

(一財)自治体国際化協会多文化共生部多文化共生課 主事 加藤 康一郎

普段当たり前日本語を使用している日本人でも、敬語の使用など日本語は難しい言葉だと感じることも多い。群馬県立女子大学地域日本語教育センター講師の楊廷延（ヤン・ジョンヨン）さんは、日本語を大人になって一から学習し、現在では日本語を教える立場にある。韓国・ソウル市出身、今年で来日17年目。なぜ、日本語を学び始め、日本語を教えるに至ったのか。また、楊さんが取り組む「地域日本語教育」とは。話を伺った。

1. 日本語との出会い・日本語教育に携わるようになった経緯
加藤（以下、－）日本語を学び始めたきっかけはなんですか。

楊 アニメや漫画など日本の文化に興味をもって日本語を学ぶ若者が多いと思いますが、私は、もともと日本に興味があったわけではありません。父の勧めにより軽い気持ちで半年程度の予定で来日したのがきっかけです。韓国では語学留学をする学生が多いんです。姉も日本に留学していましたので特に不安はありませんでした。

－日本に来たときの印象はどうですか。

楊 あまり韓国と変わらないなあと思いました（笑）。街の雰囲気も韓国に似ていましたし、看板がハングルではなく、漢字や仮名表記という違いくらいですかね。

－日本語はどのように勉強されましたか。

楊 日本語学校に通って勉強しました。初級から上級まで系統的に学び、日本語能力試験を受験し、その後日本の大学に進学しました。特に、日本語の擬態語や擬音語に興味があり、大学院では言語学を専攻し、修士論文を仕上げました。

－日本語を勉強する上で工夫されたことはありますか。

楊 大学に入ってから、日本人の友達の話方を観察して真似をしました。日本語学校で文法などは散々学びましたが先生以外の日本人とはやりとりしたことがあまりなくて。友達と話すことで自然な会話（こう言われたらこう返す）の方法や、発音・イントネーションを身につ



授業風景

けました。その代わりに、よく真似をした友人の口癖「～みたいなの」というのがうつってしまいました（笑）。

－日本語を学んでいて感じたことはありますか。

楊 発音や文法、語法の難しさよりも、外国人の日本語話者に対する日本人からの評価が厳しいことが気になっています。日本人同士では、相手が少し間違っただけをしてもあまり気にしないと思いますが、相手が外国人だと「やっぱり外国人だから間違えてるな」という評価を下すことが多いように感じます。

－日本語教育に興味を持たれたのはいつですか。

楊 修士課程の時に、群馬県内の小学校の日本語教育の現状を調査し、それから興味を持ち始め、博士課程では地域の日本語教育にシフトしました。

2. 地域日本語教育センターについて

－所属の地域日本語教育センターについて教えてください。

楊 在住外国人の日本語の学習・支援の拠点として、平成24年4月に設立された組織です。センターの目的としては、①日本語教員養成②教材開発③外国人住民への日本語学習支援④関係機関との連携があります。その中でも、主に日本語教員養成に力を入れています。でも、日本語教員になる学生はあまり多くありません。入学当初は志望していても、具体的に就職先を検討していく上

で、待遇面の悪さなどを理由に敬遠してしまいます。私自身の経験を話し、「何とかやっていけるよ」と伝えますが難しいですね。

一組織名は「地域日本語教育センター」ですが、従来の日本語教育との違いはどのような点ですか。

楊 従来の日本語教育は、主に留学生を対象に教育機関で一定期間授業を行います。日本語学習の目的も進学や就職などとわりとはっきりしています。一方、地域日本語教育は、地域住民を対象に公民館などで日本語学習支援を行っており、学習目的も様々で、学習内容も定まっています。従来の日本語教育と地域日本語教育はどちらが優れているといったものではなく、学習者の学習目的や状況によって選択されるべきものです。

3. 日本語教室について

一日本語教室の現状、課題についてお話をください。

楊 まず、日本語教室に課せられた役割が多いと感じます。「日本語学習の支援」を中心に据えた活動のはずなのに、「地域社会との接点」「人とのつながりを得る場」などとさまざまな役割が求められていますよね。もちろんそのような役割も大切ですが、本末転倒になってはいないかと。多くの役割を担わされて目的が見えづらくなり、外国人住民が日本社会で自立して生活していくための“日本語学習面の支援”をするという本来の目的が十分に果たせない状況になっているのではないかと危惧しています。

次に、日本語教室の運営形態についてです。現在、多くの教室が民間主体で運営され、ボランティアが協力しています。しかし、諸外国では、行政が責任をもって住民サービスとして行っているところがあります。日本も同様に住民サービスとして提供する必要があるのではないかと考えます。日本語ができなくても入国できる現状を踏まえ対応する必要があります。ただし、その場合、税金が使われるわけですから、市民意識の変化が必要です。日本語教育の必要性を市民が認識し、日本語教室を社会に開かれたものにしていかなくてはならないのではないのでしょうか。

また、ボランティアのあり方についても検討する必要があります。誤解しないでいただきたいのは、言語教育の専門家ではない日本語ボランティアは日本語教育に携わってはいけないなどといった意味ではありません。む

しろ、多くの一般市民の方に、地域に暮らす自分とは異なるルールを持った人に興味・関心を持ってもらい、互いに支え合っていく社会であって欲しいですし、もっと若い世代に日本語ボランティアになってほしいとも思っています。ただ、その際に「先生となって教えようとしていないこと」ですね。あくまで日本社会や日本語を知る地域住民の一人として、外国人の方と接する。例えば、「安いスーパーを知っているからその情報を共有する」といった感じでしょうか。もちろん外国の方が持っている情報があれば情報交換していくこともあるでしょう。対等な関係の中で自然な対話が生まれ、互いに信頼を築いていけると思います。

4. 今後について

一今後の目標を教えてください。

楊 私は、地域の日本語教育の場に携わっている者として、また、自ら日本にルーツを持たない一構成員として、自分の能力を発揮し、より暮らしやすい社会の実現に向けての対策を講じていきたいと考えています。学生たちには日本語教育の知識と技能を、地域住民（日本人側）には歩み寄るための理解と知恵を、地域住民（外国人側）にも歩み寄るための知恵と努力を、それぞれが自覚し学んで身につけていけるようにしたいと思っています。とても一人では無理な話ですが、少しずつでも、将来（次世代）のための布石を打っていきたくと考えています。

ヤン・ジョンヨン氏プロフィール

韓国・ソウル市出身。平成24年より現職。平成27年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育コーディネーター研修の講師を務める。

